
とある兄妹の連続転生物語～憑依編～

あいあむウィーゼル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある兄妹の連続転生物語〜憑依編〜

【Nコード】

N4164Z

【作者名】

あいあむウィーゼル

【あらすじ】

始まりはもう思い出せない。魂が摩耗するほど遠い昔。幾度となく転生人生を繰り返す兄妹が、とある世界の主人公達に憑依する事になった。ある意味最強とも言える彼らは、どんな物語を紡ぐのか。警告：この作品は所謂「最低系」です。また、主人公達が主要人物に憑依するため、ハッキリ言って完全に別人です。そういった話が苦手な方は読むことなく回れ右する事を作者は推奨します。

キャラ紹介（前書き）

ネタ倉庫の「連続転生物語」を読んでない方には、どういう設定か分からないかもしれません。

なので、こっちで簡単にキャラ説明をさせていただきます。

特に物語に大きく影響するわけではないため、こっちを読んでもネタバレになる事は無い、と思います。

キャラ紹介

デフォルト名：風峰陸斗

リクト・カザミネ

生者の兄の方。一人称は「俺」。

基本的に常識人だが、稀にテンションが悪ノリする事があり、そうになるとやり過ぎる事が多い。

玲夜に関しては「兄妹」という関係を超越した絆を持っており、長い転生人生を送る中では肉体関係を結んだ事もあれば、結婚した事もある（当初はあくまで妹だったが、精神が長く生きる中で摩耗してしまったのかもしれない）。

利用できるものは何でも利用するタイプで、自分の容姿が美形なら、それを使って異性を籠絡する事も厭わない。

ISの世界において、何故か死亡してしまった『織斑一夏』に憑依する。

デフォルト名：風峰玲夜

レイヤ・カザミネ

転生者の妹の方。一人称は「私」。

誰にでも丁寧な口調で接するが、陸斗の敵と見なした相手には決して容赦はしない。

基本的にやんちゃをするのが玲夜、諫めるか悪ノリするかなのが陸斗である。

陸斗に対し、元から強い愛情を抱いていたが、転生人生を送る中でそれがさらに強まったのか捻れたのか定かではないが、兄妹や異性では収まらないほどの愛を抱き、それは例え実の兄妹で転生しても厭わないほど。

嫌いな相手は徹底的に磨り潰し、完膚無きまでに絶望させて倒すのが好み。

ISの世界において、偶発的な要因で死亡してしまった『篠ノ之箒』に憑依する。

“彼女”

転生システムの管理人。

当人曰く、「神様であり、死神でもあれば、悪魔でもある」らしい。陸斗達には幼い少女に見えているが、外見は見る人によって千差万別で、「長い髭の老人」に見える人もいれば、「翼の生えた女神様」に見える人もいるとか。そもそも性別があるのかすら不明なので、

“彼女”と形容する事自体間違いなのもかもしれない。

元々の始まりは、世界から弾かれてしまった陸斗達を別の世界へ転生させた事から。人生が終わる度、また別の世界へと転生させている。“彼女”にしてみれば、陸斗達の存在は数少ない娯楽であり、彼らがどう生きるのかを眺めるのが楽しめらしい。

全ての世界を把握しているわけではなく、稀に「激しくカオスな世界」があったり、他の転生者がいたりするのは、“彼女”の責任では無く、「形骸化したシステムの弊害」らしい。

ブログ：ある意味、これって円環の理？（前書き）

以前、活動報告でお知らせした通り、投稿してみる事にしました。

と言うのも、ずっと同じ話を書いているとスランプになってしまふので、たまにはこういう最低系なお話を書いて気分転換でもしてみようかなと。

改めてもう1度言っておきますが、これは主要人物に2人の兄妹が憑依する話です。そのため原作の2人はほとんど登場しません。さらに言うとはこれは「最低系」と呼ばれるジャンルです。

多作品のネタはありますし、ハーレムっぽくなるかもしれませんが、さらに言うとは最強になるかもです。

そういった表現が苦手な方は、スクロールする事無くウィンドウを閉じる事を推奨します。

それでも読みたいという方は画面をスクロールしていただいて結構です。転生兄妹の憑依人生をお楽しみください。

ブローグ：ある意味、これって円環の理？

「罰ゲームです」

「「は？」」

通算……何回目かは忘れたが、もう確実に千年は超えてるだろう
転生人生を送っている俺たち兄妹。

前回の世界、コズミック・イラの太陽系こと『機動戦士ガンダムS
EED』の世界の人生を終えて、再びここへと戻って来ていた。

戻って来た俺たちを出迎えたのは……怒り心頭という様子の“彼女”。

お説教が始まった。

「あなた達やり過ぎなんですよ！ やり過ぎたらこっちで調整する
のが大変だっていつも言ってますよね！？」

「いや、つい……すまん」

「すまんて済むと思わないでください！！」

とりあえず謝るが、涙目でそう怒鳴る“彼女”。

ぶつちゃけ怖くないし、可愛いとしか思えない。

「…………元はと言えば、あなたが物騒な世界にばかり転生させるからでしょう?」

どこか諦めたように、玲夜がそう呟く。

まあ、ガンダム関連は全部戦争だしな。大規模ビームだったり、コロニーに毒ガスだったり、コロニー落としだったり、核ミサイル撃ち込まれたり、金属生命体襲来だったり…………物騒な事しか思い浮かばない。

「仕方ないじゃないですか。…………その方が楽ですし、面白いですし」

「ぶつちゃけた!? ぶつちゃけてるぞ、おい! しかもその理由なんだよ、最低だな!」

「つまらない仕事ばかりしてる私の唯一の娯楽なんです! それにあなた達だって途中からノリノリだったじゃないですか! 何太陽炉なんて作ってるんです!? どれだけバランスブレイクだと思ってるんですか!?」

「作ったのは俺じゃないぞ、イオリア・シュヘンベルグだ」

てか、何でコズミック・イラにイオリアがいて、太陽光発電システ

ムの論文があるんだよ。

何で「乙女座でセンチメンタリズムな武士仮面」とか、「不死身の炭酸飲料」とか、「露西亞の穴熊」なあの軍人がいるんだよ。

家系図やテレビ見て、見知った名前がいくつかあつて思わず噴いたぞ。

「…………いや、あれは私も想定外だったかなと。たまにあるんですよ、変にクロスした世界」

ああ、それはよく知ってる。

確かに前に経験したカオスと比べれば、今回のはまだマシだったと思う。

大分前だが、「けいおん」や「らきすた」などの平穩その物が混ざり（これだけなら問題無い）、さらに「スーパー戦隊」や「仮面ライダー」が混ざった（明らかにこの辺はおかしい）カオスな世界に転生した事があつた。

…………その時の事は衝撃的すぎて、思い出せるが思い出たくない。記憶の底に沈めておきたい。

ただ1つ言えるのは、もう二度とあんな世界はご免だ。

「それはさておき…………あなた達やり過ぎなんですよ!」

否定出来ない。

さすがにダモクレスはやり過ぎたかな〜って思っていたが……………うん、反省はしている。

いや、実際に使うつもりは無かったんだよ。あくまで抑止力、脅しのための道具であって、フレイヤを撃つつもりは無かった。

……………まさか、内部でジャスティス核爆発させて、その連鎖反応で恐ろしい事になるとは……………。

だって普通にそんな事しないだろ！？ 何でよりによって核爆発なんだよ！

「だからって何でダモクレスなんです！ せめてメメントモリにしないよ！」

「そっちかよ!!」

あれは……………一応考えたが、軌道エレベーターが無かったらダメだし。

「まあ、その辺にしておきましょう。何なんです、罰ゲームって」

「いえ罰ゲームという程ではないんですが、とりあえず厄介な仕事

をお願いしようかと」

「は？」

「ぶつちやけると、想定外の事態が発生して1つの世界が壊れそうなので、お二人に修復してもらいます」

……嫌な予感しかない。

「率直に言ってください。何をしろって言っんです」

「ぶつちやけると、「インフィニット・ストラトス」で、とある主要人物が死んでしまったので埋め合わせに憑依してください」

ああ、そう言う事が。

転生の別物として『憑依』というものがある。

転生だとその世界の住民として最初から生まれ落ちる事なのだが、憑依だと世界の住民に魂の状態でくっついて、その人物になる事を意味している。

もちろん、身体を乗っ取る事と同義なので、俺たちとしては罪悪感のような物を感じた事があった。最初の方は抵抗感もあったし。

……だが、もう何百年も転生したりしてきたので、もうそんな感情はほとんど湧いてこなくなってしまった。やはり魂が摩耗してい

るという事なのかもしれない。

それでも特定人物に憑依するという事は、ある意味最初からフラグが建ってるようなもので、出来る事なら憑依は避けたいものだ。例えば主人公に憑依だと、死亡フラグやその他諸々のフラグが建ってしまう。主要人物以外でも、変に死亡フラグが建ってるキャラに憑依してしまい、酷く厄介な事件が起きた事もあった。

具体的に言うと、「なのは」でだな。俺、高町なのはに憑依したんだぞ？　あり得ないだろ。

あの時の話はしたくない。出来れば思い出したくもない。女になるなんて二度とご免だ。

「で、誰に憑依するんだ？」

「それは、憑依してからのお楽しみで」

……………この時、すっかり聞き出しておけば余計な混乱は無かったのかもしれない。

「っ……………」

頭が痛む。

ぼやける視界が、徐々に広がっていく。

視界に飛び込んでくるのは、白い部屋。どうやらベッドに寝かされていたらしいが、ここは……………。

「病院、か？」

男の声だ。女に憑依しなかった事を内心喜びつつ、周囲を見渡す。

どうやら病院の……………それも個室らしい。

痛む頭に手を当てると、何かが巻かれている。これは……………包帯？

「アイツが言ってた「死んだ」っていうのはこういう事なのか……………」

…」

何かしらの怪我を負い、それで死んでしまった。

さすがにそのまま放置は出来ないの、代わりに俺を突っ込む事で安定させてるところだろう。

……で、俺はいつたい誰なんだ？

「インフィニット・ストラトス、だったよな」

ちよつと待て。

今思い出してみたが、あれには男性が恐ろしく少なかった気がする。

俺は男に憑依出来た事を喜んでいたが、これってある意味フラグなんじゃ…………。

「まさか……………」

嫌な予感がしつつも、鏡を探す。

部屋に備え付けの鏡を見つけ、中を覗き込んで…………後悔した。

「よりによって織斑一夏（しむらひとなつ）かよ、コンチクショウ!!」

思いつきり吠えた。

よりによって何で織斑一夏なんだよ！　せめて五反田弾とかならまだ平穩だったよ！

……まあ、確かに織斑一夏が死んでしまえばとんでもない事になる。てか、主人公がいない物語は完璧破綻するし。

この分だと、玲夜はヒロインの誰かに憑依していそうだな。

「……………とりあえず、これまでの事を思い出してみるか」

俺はもう既に織斑一夏なので、その記憶はある。

えっと……………まだIS学園に入る前だな。今はまだ中学生か。

第2回モンド・グロツソに千冬姉の応援に来て、会場へ向かう途中、見知らぬ女性にいきなり気絶させられてどこかの廃工場へ連れて行かれた。

……………で、何か言い争いのような物を聞いたが、その直後銃声が聞こえると同時に意識が……………。

（よく分からないが、仲間割れでも起きたらしいな）

そこで織斑一夏は死んでしまい、代わりに俺が突っ込まれた……と。しかし、何でこんなイレギュラーが発生したんだ？ よく憶えてないが、特に怪我はせずに助けられるはずじゃ……。

(……………転生者でもいるのか？)

2番目に嫌なパターンとして、自分達以外のイレギュラー……………他の“転生者”の存在がある。

まあ、無害な奴もいるんだが、たま〜に厄介な奴もいたりする。

画面の向こうの君たちは「俺TUEEEEEEEEEするハーレム好きな最低系転生者」だと思ってるみたいだが、まあそれも厄介だが、それ以上に厄介なのは「全てを幸せにしたい」と考える奴だ。

『無能な働き者。これは処刑するしかない』という言葉がある。

原作通りに進めようとするならまだいい。だが、なまじ不幸なキャラがいて、それを幸せにしようと改変する奴こそ、厄介極まりない。

……………かなり昔の話をしよう。俺たちがそんな転生者の所為で、極めて多大な被害を被った時の話を。

2回目か3回目の『リリカルなのは』だった。そいつはアリシア・テストロッサの事故死を食い止め、テストロッサ家と幸せな未来を

築こうとした。

しかし、それが何を意味しているか分かるか？

アリシアが死なない。フェイト・テストロッサが誕生しない事を意味している。

すなわち、原作が始まる前から破綻してしまっているのだ。

もちろんジュエルシード事件については、平和的に解決はした。

運搬船は原因不明の事故を起こし、運命通りにジュエルシードはバラまかれた。

……ただ問題だったのはそこからだ。具体的に言うと、闇の書事件やJS事件。

フェイトがいない、すなわち戦力が低下する。原作だとシグナムと戦ってたが、彼女がいないのでシグナムを食い止める人間がいない。

フェイトがいないので、その使い魔たるアルフも存在していない。ぶっちゃけファイラも止まらない。1人くらいならクロノが何とか出来るが、さすがに2人は辛い。

仕方なく、俺たちが出張る事になり、最終的に六課まで頑張る事になった。

さらに言うのだが、プレシア・テストロッサが完成させるはずだった「プロジェクトF」についても完成される事なく、そのためその技術を用いて誕生するはずだった生命は生まれる事が無い。

すなわち、エリオ・モンディアルは誕生しなかったのだ。

……なお、戦力ダウンのために俺たちが苦勞したことは言うまでもない。

だって、どちらも『世界終了のお知らせ』級にヤバイ事件だぞ！？
ほっといたら平穩とはほど遠くなるぞ！？

「……………いないと、いいなあ」

私、風峰玲夜が『篠ノ之箒』に憑依してから10年ちよつとが経とうとしている。

色々あった。ええ、色々あったんですよ。

箒が篠ノ之束を嫌うのも分かる。あのテンションはウザ過ぎです。少し離れて接するならともかく、常時アレはキツい（ちょっと邪険にあしらうと、この世の終わりの如き状態に陥り、首を吊ろうとするので大変だった）。

「ふう……………」

素振りを終え、竹刀を傍らにおいて一息入れる。

憑依してからは出来る限り、篠ノ之箒らしい言動と行動を心掛けている。一応、彼女の記憶と人格については完全に理解しているので、「こういう道を進むんじゃないか」という感じです。

剣道を続けているのもその1つ。……………少しやり過ぎて、全国三連覇とかやつちやいましたけど、特に問題無いですよ？

それはともかくとして、やっぱり高校はIS学園に進学する事になりそうです。

まあ、私がそっちに進むのは『監視』と『保護』という名目が大きい。

何せ、ISを開発した篠ノ之束の実の妹であり、政府側としても監視する必要がある。

同様に両親もそのような扱いを受けているわけなのだが、特に私の

場合、姉が溺愛する数少ない相手であり、篠ノ之束の掌握を目論む人間からしてみれば、充分に狙われる要因ともなる対象となる。

ISの生みの親である彼女が特定の団体に力を貸せば、間違いなく勢力が傾く。だからこそ、私は特に監視と保護が強化されているわけなんですが……。

「篠ノ之さん、大変よ!!」

と、飛び込んで来たのは同じ剣道部の同級生。

胴衣のまま、その手にはポータブルテレビが握られている。

「ほら！ 世界初の男性IS操縦者だって!」

「ん？」

画面には、すっごく微妙そうに強ばった表情の織斑一夏のアツた。

……うわー、やっぱりこうなっちゃったんですね、兄さん。

プロローグ：ある意味、これって円環の理？（後書き）

何百年も転生人生を送ってきて、何で他の世界のことを憶えているのか。

もしかしたらこう思う人もいるかもしれませんが。

「嫌な出来事」って、妙に印象強く思い出に残っていたりしません？

例えば、恥をかいたり、ショックを受けたり、そういった嫌な記憶が鮮明に残っていたり………しません？

私が自分の具体例を挙げるとですが、小学生の頃に「新撰組の隊員で誰を知ってますか？」と先生に聞かれ、迷わず「斉藤」と答えたら「るろうに剣心だろ」と笑われた事があります（実在の人物ですが、やっぱり子供としてはそっちの方が印象強いらしく、かなり恥ずかしい想いをしました）。今でも忘れられません。

そのため、陸斗達にとって「激しく嫌な思い」をした出来事について、憶えていたくないのに憶えていてしまいます。

「ガンダムSEED」にOO成分が混ざった世界は………まあ、まだマシです。ただ、激しくカオスな世界に関しては、衝撃度が強すぎて忘れられない。そんな感じです。

彼らが体験した世界については、ネタ倉庫にあるものもそうですが、要望があればもしかしたら番外編という形で書き下ろすかもしれません。

第1話：一夏君が木刀を振るう。ただそれだけの話（前書き）

今回、ネタが多数あります。ご注意ください。

第1話：一夏君が木刀を振るう。ただそれだけの話

「ぐはっ！」

木刀を振るい、前方の不良を吹き飛ばす。

まだそこまで筋力は付いていないため、今の一撃程度ではせいぜい骨折もしていないだろう。

……だが、大分勘も戻ってきたな。

「乙女座の私では、センチメンタリズムを感じずにはいられないな」

……ま、9月27日生まれだから天秤座だけだな。

「な、何なんだよこの変態は!!」

む、失礼な連中だ。

そう言えば自己紹介……というか、名乗りを上げていなかった気がする。

「ならば敢えて言わせてもらおう。武士仮面であると!!」

「『名乗ってねえ!!』」

何を言う。この仮面が目に入らぬか。

前の世界の時、正式に「ミスター・ブシドー」の名前と仮面を、俺は正式に譲り受けた（本人曰く「勝手にそう呼ぶ」から、押しつけられたに近いのだが）。

……まあとりあえずお前ら、倒される。

「っざけてんじゃねえっ!!」

鉄パイプやらチェーンやら木刀を握り、不良共が俺へと迫る。

確かに数だけなら驚異的だ。普通に十数人相手にするなら、結構手間がかかる。

だが、だからこそ訓練になる。

振り下ろされる鉄パイプを、木刀で横へと弾き、腹に蹴りをお見舞いする。

そのまま振り返り様に、背後にいた不良へ横薙ぎに木刀を叩き込み、再び構えを取る。

「こ、このガキ……………強え!」

「どれほどの戦力差であろうと、今日の私は阿修羅すら凌駕する存在だ!!」

……………なあ、一夏。

「どうした、弾?」

「これ、お前の仕業だろ」

そう、隣の席に座る親友に、週刊誌を見せる。

その見出しには『敢東連合壊滅!? 謎の戦士、ミスター・ブシド

「とは？」

「ご丁寧にも、そこには陣羽織っぽい服装に、武者っぽい仮面を装着した一夏らしき人物の写真が載っている。」

「……………その足下に、積み重なった不良達がいるのなんて、俺には見えない。」

「何の話だ？」

「いや、これ明らかにお前だろ！？」

「確かに顔は隠れてるけど、髪型とか顔の輪郭とか目とか、確実にコイツとは思えない。」

「てか、何だよミスター・ブシドーって！？」

「武士仮面は武士仮面だろ？ 俺は知らん」

「……………お前、向こうから帰ってきて性格変わったよな」

「何でもコイツ、モンド・グロツソに千冬さんの応援に行つて、誘拐されて頭撃たれたとか。」

「ワイドショーでそれ見て、飲んでた茶噴き出したぞ。蘭なんてショクで倒れるし……………」

鈴も今すぐ飛行機に飛び乗ろうとして、アイツの両親が必死に止めてたくらいだ。

で、そのワイドショーから2週間くらい経って戻って来たんだが……別人と言ってもおかしくないくらい変貌していた。

「ねえねえ織斑君、昨日のノート見せて貰ってもいい？」

「ああ、いいよ。ほら」

「ありがとう」

……いや、コイツは元からモテてはいた。

家事は万能でスポーツもそれなりに出来る。おまけに顔もかなりイケメン。

自分を中心にした恋愛事に対し、超絶的なほどに鈍感さ（人呼んでキングオブニブチン）を除けば、「このリア充が！」と叫びたい。

これまでもクラスの女子はもちろん、鈴や蘭からもそれなりにアプローチを受けていたが、見てるこっちが不憫になってしまいうほどにスルーしていた。

去年のバレンタインも、幾つも本命チョコ貰っておきながら、「食べきれないから」と言う理由でクラスの男子に配っており、タコ殴りにしたのは記憶に新しい（蘭が気合入れて作ったのもその中に入

っており、その時の俺は殺意の波動に目覚めたかもしれない。

それが今ではこの通り……行為自体は前と変わらないが、接し方がより洗練されたものになっている。

（……………コイツ、本当に一夏か？）

本当は誘拐された時に入れ替わったんじゃないか？

……………いや、もしそうなら千冬さんが即座に斬り捨ててるな。

織斑一夏は基本的に美男子である。

先ほども五反田弾が評価したように、家事は万能、顔立ちも整って

いるし、運動能力だって高い（しかも現在進行形で成長中）。

ただ、彼の最大にして最悪の欠点とも言うべきが、色恋絡みに関する鈍感さである。

「付き合って！」と言えば、「（買物に）付き合えばいいんだな？」

「好き！」と言えば「（友達して）俺も好きだぞ」

そのため、これまで不憫すぎるほどのスルーっぷりを発揮し、フラれていった女子の数は数え知れない……。

（せっかくのイケメンスペックなんだし、もっと有意義に使わないとな）

だが今回、中の人が違う。

なかのひと
風峰陸斗は長い人生を経験してきたため、人の心の動きにはそれなりに機敏であり、本来の織斑一夏ほど鈍感じゃあない（一緒にされる方が迷惑だ）。

陸斗は基本的に、自分に備わったものは何でも武器にしようとする。容姿が女性受けするのなら、それを有効活用し、女性を籠絡する事も厭わない。

今日はちょっとした用事があり、カジュアルな服装で固めて街へと

乗り出し、一夏は喫茶店で一息ついていると……………。

「……………あ、あの」

振り向くと、そこには何人かの少女の姿が。

自分とそう変わらない年頃だろう。ショッピングにでも来たのか、手には紙袋が提げられている。

「よかったら、一緒にお茶しませんか？」

少し緊張したように、少女がそう訪ねてくる。

一方の一夏だが、微笑を浮かべつつも冷静に少女達を見定めていた。なかなかの美少女だ。先約さえ無ければ、このままデートにしゃれ込んで悪くはない。

「悪いが、今日は待ち合わせをしていてな」

「そ、そうですか……………」

「また今度、時間が空いている時に誘ってほしいな」

ちよつと残念そうに立ち去っていく少女達。

そんな彼女達と入れ替わるようにして、1人の少女が喫茶店へと入り、一夏の正面の席に座る。

「……………随分と軟派なんですね。私、お邪魔でしたか？」

「おいおい、その口調は少しマズくないか？」

「心配ありません。監視はしませんし、それにあなたと接する時から素に戻らせてください」

……………普通、敬語は素で使うものじゃないんだがな。

ま、どうでもいいか。久しぶりだな、れいや 篤。

「ええ、お久しぶりです。にいさん 一夏」

きっかけは、一通のファンレターだった。

差出人の名前は『風峰陸斗』。

内容はそこまでおかしいものではなく、ごく普通のファンレター。

もし、篠ノ之箒が本来のままだったら、単なるファンからだと思い、そう気にも留めないだろう。

しかし、篠ノ之箒が私だったからこそ、このファンレターは特別な意味を持つ。

その住所へ一通の手紙を出す。名前は篠ノ之箒ではなく、『風峰玲夜』で。

……数日後、再び『篠ノ之箒』宛てに手紙が届く。今度は『織斑一夏』の名前で。

「まさか、ああいう頭脳プレイで来るとは思いませんでしたよ」

「仕方ないだろ？ もしお前が篠ノ之箒じゃなかったら、余計に混乱する事になる。いくらでも慎重になるさ」

モ力を飲みながら、そう答える一夏。

まあ、もし筭だったら間違いなく混乱するでしょうね。いきなり意中の相手から手紙が来たわけですし。

それが今後、どんな影響を与えるか分からない。小さな出来事が大きな影響を引き起こす事を、私たちは身を以て体験してきたのだから。

「では、私が篠ノ之箒で無かったらどうするつもりだったんです？」

「やっぱり、その時が来るまで待つしか無かっただろうな」

そりゃあ、そうですねえ。

主要人物なのだから、やはり原作が始まる時期にならなければ会う事が叶わない相手だっているはず。

もちろん、それなりの立場にいて、時間がある人間なら接触する方法があるかもしれませんが……。

「そう言えば、お前はいつから憑依してたんだ？」

「8年ぐらい前ですね。イレギュラーと言っても、こっちは単に事故に遭っただけですよ」

事故で頭を強打して、奇跡的に助かった……という事になってます。少なくとも、この辺りに誰かしらの意図は見られませんでしたし、単なる偶然と判断してもいいでしょう。

そっちは……………例の誘拐ですか？

「ああ。頭撃たれてお陀仏になりかけてた。仲間割れか知らんが、こっちにはイレギュラーがありそうで嫌になってくる」

揃って苦い顔になりつつも、ケーキを口に運ぶ。

1番嫌なパターンとして、転生者が関わってる事。

下手に干渉して、それで厄介な事になる。それも経験した事があるので、頭が痛くなってくる。

篠ノ之箒の記憶の中だと……………それらしき影はいませんね、多分。

「今のところ、こつちもな。……………だが、警戒は怠らない方がいい。お前もしっかり『篠ノ之箒』でいてくれ」

「分かっている。お前こそ、変な真似はするんじゃないぞ」

もう何年も猫被ってますし、これくらいは容易いですよ。

姉さんしののたばねですら、私の猫かぶりは見抜けていません。伊達に何千年も転生者やってませんからね。

「ただいま」

と言っても、家には誰もいない。

千冬姉はドイツだし、合鍵を持つてる人間はいない。

……千冬姉と言えば、誘拐事件以後何だかよそよそしい。憑依には気づかれてないと思うが、やはりどこか織斑一夏とは違う部分を感じているのかもしれない。

まあ、その辺りは時間が解決するだろう。ドイツから戻ってきてからの話だ。

「それまでにいくつか調べておかないとな……………」

まず調べるべき事は、俺たち以外のイレギュラー……………転生者が存在していないかどうか。

形骸化したシステムの残滓が、ごく稀に転生者を送り込む事がある。世界や俺たちにとって有害になるのであれば排除する。無害ならば放置する。

筈との会話でも言っていたが、今現在までそれらしき人物は俺の記憶の中には存在していない。

巧妙にそれを隠しているのかもしれないが、もしそうならちよつとばかり厄介な相手になる。

「まずはググってみるか」

この世界に「あり得ない」事が起きていたら、基本的に転生者の仕業だ。……………まあ、カオスな世界のように世界観を混ぜ込む事はさすがに出来ないと思うが。

パソコンを立ち上げて、インターネットに接続。検索エンジン呼びだして……………。

「……………物騒な事件が起きてるもんだな」

検索エンジンに掲載されていたニュースが目飛び込んでくる。

つい先日、自分の身に起きた事件を棚に上げて、そう呟く。

何でもどこかの国の代表がモンド・グロッソの個人競技において、相手に過剰な攻撃を加え、反則スレスレで勝利を掴んだ事が問題視され、この前まで協議されていたというニュース。

元々その代表はかなり問題のある性格らしく、他にも問題を起こしているとか起こしていないとか……………お、すごい美人。鈴が見たら確実に羨むだろうな……………。

「つとと、いかんいかん」

余計な事に気を取られてしまった。

しかし、何をキーワードにすべきだろうか。

まあ、適当に俺が生まれたであろう時期に、何かしらの事件が起きなかったか調べてみよう。

「……………おお、出てくる出てくる」

その中でも目を引いたのが、「親が子供を殺す」という事件。

遺伝上、生まれるはずのない形質を持った子供が生まれてきたために、夫が妻の浮気を疑い、子供諸共殺害するという事件だ。

……そりゃあ、純日本人なのに金髪に碧い瞳とかだったら怪しむって。

他にも、子供の異常死が多数報告されている。

それでも生き残った人間がいるらしく、分かりやすく言うなら「ふるいにかけられて、残った」という事なんだろう。

「エルトナ・ハーミット、か」

13歳にして、フランスの代表候補生を務める彼女は、国家代表に最も近い存在だとされているらしい。

自身で製作した専用機「ラファール・リバイバル」を駆る姿は「聖少女」と呼ばれているとか。

……え？ 何で気づけたかって？

そりゃあ気づくって。見た目が某歌姫と瓜二つだし、動画の発言がネタ塗れだし。

「敵対さえしなければ、大丈夫だろ」

そう、その時はまだ楽天的に考えていた。

第2話：イレギュラーは知らぬ間にいなくなる

エルトナ・ハーミットは転生者だ

前世で死んでしまった彼女は、何の因果がこの「インフィニット・ストラトス」の世界へと転生を果たした。

生まれはフランス。両親はデュノア社に務める研究員。

彼女は幸い、あらゆる能力に秀でていた。特典なのかどうか分からないが、IS適正値はS。

第2世代の「ラファール・リヴァイヴ」を改造して、自分の専用機を作り上げる事が出来た。

彼女の実力を認められ、代表候補生に選抜もされた。

あたしは主人公だ。この世界に舞い降りた、オリ主だ。

……そう、ついさっきまではそう思っていた。

「な、何なのよアイツは!?!」

絶対的な恐怖。

今のエルトナを支配しているのは、それだった。

震える身体をどうにか抑え込み、相手を見据える。

……上空から彼女を見下すその女性は、ただ嗤っていた。

「あらあ？ 私に最も近いって聴いてたんだけど、この程度？」

リフィリス・シャミナード。通称“シスターリフィリス”。

艶やかな銀色の髪に金色の瞳を持ったその女性は、現フランスの国家代表だ。

IS関連において、篠ノ之束や“ブリュンヒルデ”織斑千冬に次いで名の通った存在。

第2回モンド・グロッソでは個人戦を始めとする各種競技で優勝に輝いたが、ある問題を起こした事で総合優勝の座にはあがれずにいる。

「この、殺人狂……ッ！」

エルトナが震える声でそう叫ぶ。

シスターと呼ばれてはいるが、彼女は実際に聖職者ではない。

ある事件によって彼女は聖職者としての道を歩めなくなったのだが……その経緯はおいおい語る事にしよう。

彼女が総合優勝出来なかった理由。それは彼女の性格に問題があったからだ。

殺人狂。先ほどエルトナがそう呼んだように、リフィリスは他者を殺す事で快楽を得ようとする異端の存在。

これまで公式の試合では、絶対防御をも撃ち抜く過剰な攻撃を加え、流血沙汰にまで発展するケースが多々ある。……表沙汰にはなっていないが、非公式の試合では相手を死に至らしめた事もあるという。

それだけの問題行為を行っていたながら、何故相応の処罰が下らないのか？

それは彼女が、その欠点さえ除けば極めて優秀なIS操縦者だからである。

「つまらないつまらない、もう一つおまけにつまらない」

ひどく愉快そうに、リフィリスは嗤う。

激昂したエルトナはリフィリスに向けて、右手のマシニングンを放つ。

無数の銃弾は正確に対象と向けられているが、対するリフィリスはわずかに重心をずらす事で、必要最低限の動きで攻撃を躲す。

格の違い。レベルの差。

こうなったのは全て、エルトナの自意識過剰からである。

確かに彼女は強い。才能もある。国家代表に最も近いとも言われている。それが彼女を天狗にしまった。

「あれだけ啖呵を切っておきながら、こおんなに雑魚なんてつまらない」

「う、うるさいっ!!」

ただ引き金を引き、マシンガンを乱射する。

激昂するままに銃弾は放たれる。狙いなどつけられておらず、かえって回避は難しい。だが一切被弾しない。

何故当たらない。

エルトナの頭の中には焦りが生まれている。

恐怖と焦り。それは判断力を鈍らせる。

——瞬間、赤い液体がアリーナに散った。

「っあ、あああああああああああああああああああ！
!?????」

理解するよりも激痛が早い。

マシンガンを握っていたエルトナの右腕が、“ラファール・リバイバル”の右腕部と共に切断されたのだ。

あり得ない。シールドエネルギーはまだ尽きていない。絶対防衛も正常に作動している。

なのに、腕が斬られた。操縦者に傷を負わせた。何故？

「あらあ？　うるさかったから斬っちゃった」

きよとんとしたように呟くりフィリスの手には、片刃剣が握られており、その白い刀身は鈍く輝いている。

リフィリスの専用機、第3世代IS“アズール・ゼフィーレ”。その固有武装『デュランダル』。

アズールには基本的に、それ以外の武装は無い。状況に応じて切り替える事はあるが、彼女はデュランダルによる近接戦闘を好んでいる。

「ん……………」

「ひっ！」

ゆっくりと近づいてくるリフィリスに、エルトナは後ずさる。

あまりにもリアルな死の恐怖。

逃げられるはずがない。それでも、彼女は後ずさる。

迫り来る死の宣告を、少しでも後送りにしようと。

「じゃあね」

につこり微笑んだリフィリスの顔。

それがエルトナの見た最後の光景だった。

「……………」

後輩の山田君からかかってきた連絡に、私は頭を抱えていた。

リフィリス・シャミナードがまた問題を起こしたらしい。

第2回モンド・グロツソにおいて、決勝で私と戦えなかった憂さ晴らしなのか、他の競技で敵をISが完全破壊されるギリギリのところまで黽っている。

實力だけならば、私と同等……………否、私をも上回るかもしれない。

非公式の試合で戦った時はギリギリで勝てたが、もう2度と戦いたくない相手だ。

「それでその、エルトナ・ハーミットだったか？ その候補生はどうなったんだ？」

『右腕を切断された上、肩から脇腹にかけてバツサリ斬られたそうですが、どうにか一命だけは取り留めた。ただ、操縦者として復帰出来るかは……………』

「……………そうか」

それでもシャミナードと戦って、その程度で済んだのなら運がいい。

あれはただ戦いだけを求めている。モンド・グロツソのような「スポーツ」としての戦いではなく、戦場に存在する血みどろの戦い。

純粋な命のやり取りを奴は求め、その結果、相手を死に至らしめる。至らしめなくとも再起不能レベルの重症を負わせる。……だから殺人狂などと呼ばれているのだろうが。

奴を非難する者は多いが、意外にも支持する者も多い。

シャミナードの支持者は主に軍人や武術家だ。それも男女関係無く、本物の戦いを知っている者から支持を受けている。

『それはそうと、そっちはどうですか？』

「まあまあだ。さすがは軍人、教え甲斐がある」

少しくらい無茶をしても乗り越えてくるのだからな。

日本……IS学園ではこうもいかない。指導方針が委員会によって定められているため、私の考えた指導法は適用できない。

『あんまり無茶しないでくださいよ？　一夏君も心配してましたし

……』

「……………ちょっと待て。今なんと言った？」

今、非常に気になる人名が聞こえたぞ。

『先輩の弟の織斑一夏君ですよ。この前、街に出かけたらたまたま会って、お茶に誘われたのでお言葉に甘えちゃいました』

「そ、そうか」

た、確かに山田君と私が写っている写真は部屋にあるし、それを一夏が憶えていたのかもしれない。

……………それにしても、あの事件以降、一夏の雰囲気さがらりと変わった。

これまでの一夏の優しいそれとは違い、意識を取り戻してからの一夏は、

と言うより、女を茶に誘うだと？ あれにそこまでの甲斐性があったか？ 異性からの好意に果てしないほどに鈍い野暮天に。

『先輩の事、心配しましたよ？ 「姉の事、よろしく願いします」って、すつごく礼儀正しくて優しい子でしたね』

電話口からは、やたら一夏をべた褒めする山田君の声が聞こえる。

……………あり得ない。いや山田君じゃない、一夏だ（山田君が妄想混

じりになってしまふのはいつもの事だ）。

目上の相手には相応の態度は取るだろうが、山田君がここまでべた褒めするという事は、それなりのエスコートをしたのだと想像出来る。

自慢じゃないが、我が弟はそこまで男として完成されていない。その辺りはバレンタインの一件でも分かるはず（話を聞いた時はさすがに不憫すぎて、思わず叩き斬ってやろうかと思った）。

思春期なのだから、価値観が変わる事くらいあり得るが……………。

『え、でも私年下は経験なくて……………それで言ったら男の人とお付き合いした事もほとんどないですけど、やっぱりお姉さんだから私が出来ただけエスコート……………ううん、がつつり来るのを優しく抱きしめて包容力を……………』

……………ああ、分かっている。そろそろ山田君を止める事にしよう。

これ以上放置しておく、――18歳未満お断りの世界《ノクターン行き》になりそうだからな。

「山田君、そろそろ戻ってこい」

『……………ハッ!?!』

そういう事は個人の趣味だが、当人と話してる最中にその弟を妄想のはけ口にするのは如何なものかと思う。

正直、引く。

肉体的な能力……例えば戦闘技能についてはまだまだだ。

実戦で勘を取り戻そうとしているが、前の世界が世界だけに、イマイチ取り戻せそうにない。

生身で戦ってた世界ならともかく、MS乗ってやってたからな……
…生身でやり合う事はほとんど無かったし。

だが精神的な能力……魂として憶えている経験は充分に生かす事が出来る。

具体的に言つと、「け」で始まって「ば」で終わるお金を稼ぐ方法とかそーゆー事だ。

「すげーな、坊主！ これで5連勝だぞ！？」

ちよつと汚い身なりのおっさんが、そう言つて俺の肩を叩く。

もちろん、まだ中学生の俺が馬券を買う事は出来ない。

未成年が公営ギャンブルをする事は法律で禁止されており、競馬場に入る事は出来ても馬券を買う事は出来ない。せいぜいレースを見たり、予想したりするくらいだ。

今回、かなり追い詰められてそんな男を捜し、適当にレースの予想を教え、的中率の高さを実証する。その後で取り分の交渉をして金を稼ぐ……と。

後はちよつと活躍すれば、他の連中も次第に予想を聞きに来る。

それでも生き物に関する知識は凄いぞ？ 野生児同様の生活をした事もあったり、グルメ界にだって入った事もあった（思えば、純粋に楽しいと思つたのはあの時だけかもしれない）。

どの馬の調子がいいか、どの馬が勝つとか、そーゆーのはしっかり分かる。……この辺りはトリコに感謝だな。

（まあ、千冬姉にバレたら殴られるだろうけど）

「未成年が競馬だと？ 何を馬鹿な事をしている！！」と鉄拳でも飛んできそうだ。

なので、ドイツにいる今が稼ぎ時。帰ってきてからは別の方法を考えなければならぬ。

とりあえず、アレだ。バレなければいい。稼いだ金については、俺が家計簿を握っているから隠し通せる。もしバレても「宝くじを買ったら当たった」とでも言えればいい。あの人は基本脳筋だから、そこまで詳しく知ってるわけじゃないし。

（金があつて困る事はない。裏の世界に関わるには、今稼いだ分じや到底足りない）

裏の世界は基本的にギブアンドテイク。金さえあれば大概のものは手に入る。

さすがにISOコアは手に入らないだろうが、試作段階で廃棄されたパーツやら、面白いものが見つかる事がある。

道具はもちろん情報もそうだ。情報は何よりも勝る武器。情報を制する者こそが、現代を生き抜く事が出来る。

さすがに裏の賭博だと、その道のプロがいるため（一応こつちも“手品”は出来ない事は無いが、やはり玄人には劣る）にリスクが大きすぎるが、競馬や競輪のような公営賭博ならば、完全に公平。

「君、こっちも予想して貰ってもいいかな？」

「はい」

さてと、今日のノルマは稼がないとな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4164z/>

とある兄妹の連続転生物語～憑依編～

2011年12月18日12時26分発行